
浪速のど根性

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浪速のど根性

【Nコード】

N8416F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

大阪住吉のお好み焼き屋の息子。ボクシングの試合での決勝の相手は何と東京のもんじゃ焼き屋の息子で何時になく燃え上がり。大阪のソウルフードとボクシングを扱ったお話です。

第一章

浪速のど根性

彼が生まれたのはかなり騒がしい場所だった。大阪の住吉だ。

「おい守」

「何や父ちゃん」

家にいるといつも父親から声がかかる。どうして声がかかるかというといつも同じ理由からだった。

「忙しくなってきた。店に出て来んかい」

「ああ、わかつたわ」

いつもそれに応えてゲームを中断させて店に出る。彼の家はお好み屋だった。大阪といえばお好み焼き、そういう意味では実に大阪らしい家だった。

彼の外見もお世辞にも垢抜けたものではなく歩き方も柄のいいものではない。そんな格好で街を歩きそうしていつも騒いでいた。

店でも同じだった。客を相手にするのもさばけていたが同時に柄はいいものではなかった。

「おい坊主たこ焼きまだか？」

「ちよつと待つてや」

中年の今作業現場から帰って来たといった雰囲気のお父に言葉を返す。言葉を返しながらかたこ焼き用の鉄板の上のお好み焼きをひっくり返している。

「今焼けるで」

「焼きそばはまだかいな」

「そっちはこれからや」

言いながらさらに焼きそばの用意もする。お好み焼きは客がそれぞれ焼いている。

「海苔足らんで」

「母ちゃん、海苔やて」

「あいよ」

店の後ろにいた恰幅のいい中年の女が応える。エプロンがソースで汚れて随分経つものだった。見れば店自体にお好み焼きのソースの匂いが染み付いている。煙には鰹節と青海苔、それにマヨネーズの匂いが混じっていた。大阪のお好み焼きの匂いだった。

「はいよ、海苔」

「毎度」

「ビールあるかい？」

「今度はビールや」

「ここや」

今度はさつき彼を呼んだ角刈りの痩せた男が応える。そしてすぐに瓶ビールを出してその先を何と指だけで空けてしまった。

「どうぞや」

「ええのう、おやつさんのそれは何時見ても」

「手馴れたもんやな」

「ここというのは経験やで」

ビールを頼んだ客のカップにそれを注ぎつつ愛想のいい笑顔で応える。

「空けるのみな」

「力ちやうんか？指の」

「それがちやうんや」

少し誇らしげな声でその客に言う。

「工夫とな。馴れやで」

「そういうもんかな」

「何でもそうやろが」

親父はまた笑って客に話す。

「仕事でもそやろ？まず何度も何度もやってみて」

「ああ」

「それで覚える」

このことをあえてという感じで話す。

「それやで。やっぱり」

「そういうもんかいな」

「そや。それでや」

話をさらに続けるのだった。

「うちのこいつかてな」

「坊主か」

「そや、守な」

今たこ焼きを焼き終えて焼きそばを焼いているその息子を親指で背中越しに指差す。

「こいつかて最初は下手なもんやった。それがや」

「何回もやってるうちにか」

「やっとあれだけできるようになったんだ」

「俺の技はあれだけかい」

「そや」

息子の文句にもはつきりと言い返す。

「その程度って言おうか？じゃあ」

「アホ、俺は天才やぞ」

彼も彼で負けていない。

「その天才捕まえて何言うんじゃ」

「天才やなくて天災やるが」

親父も負けてはいない。

「そこになるまでどんだけ失敗してん」

「ほんの十回位やるが」

「十回も失敗すりゃ充分じゃ」

こう返すのだった。

「十回も失敗しやがってからにな」

「そう言う親父は何回失敗したんじゃ」

「知るか、そんなもん」

また随分な返事だった。

「いちいと覚えてられるかい」

「何処までアホなんじゃ」

「親に向かつてアホって何じゃ」

「最初言つたんは親父やるが」

「子供にはアホって言うてもええんじゃ」

こんな調子で店の中はいつも騒がしい。しかしそれでも明るく雰囲気はいいままだった。その雰囲気の良い家で家を過ごしていて。

守は店が終わってから後片付けをしながら家族に言ってきた。

「なあ、今度の日曜やけれどな」

「どないした？」

「俺試合や」

こう言つたのだった。

「ボクシングのな。試合なんや」

「ほう、部活のやな」

「そうや。だからな」

「弁当か？」

「ああ、それや」

彼が言うのはこのことだった。

「弁当欲しいんやけれどな。何か作ってくれんか？」

「じゃあお好み焼き弁当やな」

母親が言ってきた。

「それでええな」

「おい、またそれなんか!？」

お好み焼き弁当と聞いて顔を顰めさせる守だった。彼は丁度今鉄板を拭いていた。拭いていると小さな女の子が彼に声をかけてきた。

第二章

「なあお兄ちゃん」

「何や沙耶」

「鉄板端まで拭いてるか？」

「当たり前やろが」

こう妹に返した。

「四角いもんは四角く掃除する」

「そやで」

「わかっとる。安心せんかい」

「そやったらええけど」

「俺は四角いのは五月蠅いんや」

そしてこうも言うのだった。

「何せボクシング部の期待の星やからな」

「そうか？」

彼より四歳程歳の下そんな男の子が床掃除をしながら応えた。

「兄ちゃんアホやて俺いつも先輩から言われるで」

「何処のどいつや、それは」

「中学の三年の先輩」

「ボクシング部の奴等か？」

「いや、皆や」

「全員かい」

言われて思わず声をあげる守だった。

「讓、三年の奴等全員か」

「皆言うてるで。先輩等が一年の時三年の登坂先輩いうたら有名な

アホやったって」

「俺の何処がアホじゃ」

自分ではそれを全力で否定したい守だった。

「俺は麒麟児やねんど、麒麟児」

「少なくとも頭は麒麟児ちゃうやる?」

金の勘定をしている母親が彼に言ってきた。

「高校かてボクシング部の特待生やるが。しかも今も留年ストレスの」

「学校の勉強なんかいるか」

今度は居直りだった。

「俺にとつちやあれや」

「あれ!？」

「あれって何や?」

「お好み焼きとボクシング」

家業まで入れていた。

「その二つが完璧やったらそれで充分や。勉強なんかいらへんや」

「そう言うても高校生で九九言えんのはどうなんや」

テーブルを拭いている父が言ってきた。

「自分の名前漢字で書けるんかい」

「それ位できるわ」

「他の漢字はどうなんや?」

「自分の名前書けたらそれで充分やるが」

こんな有様だった。

「漢字なんてな」

「やっぱり兄ちゃんアホや」

「ホンマアホや」

弟や妹達がここぞとばかりに言う。

「だから俺等兄ちゃんみたいにならへんようにつて」

「勉強して正解やったわ」

「学校の成績がナンボのもんや」

そう言われても全く気にしていない守だった。

「大事なんは学校の頭やない。まずは体力」

「次は何や?」

「それから度胸」

「そんで次は？」

「動きや」

ボクサーらしい言葉だった。

「四番目が負けん気だな」

「で、最後は？」

「最後の最後で頭や」

やっとここで出て来た。

「けれど勉強はいらんやろ」

「確かに。勉強がでけんでも生きてはいける」

父親もそれは認める。

「そやけれどな」

「何や？」

「御前最低限の知識位は持つとかんかい」

彼が言うのはこのことだった。

「親父が馬でお袋が鹿って何回言われとる？」

「気にしとらんからわからんわ」

本当に学校の勉強は気にしていないのだった。

「そんなんな。まあこれで俺の分は終ったで」

「ああ」

「ちよつとトレーニング行って来るわ」

こう言って店を出ようとす。

「帰ったら風呂は入るからな」

「あんたが最後やで」

「俺がかいな」

「最後はちゃんと風呂掃除しときや」

「ちえつ、それもかいな」

「それもトレーニングのうちや」

最後に母親の言葉が届く。守はそんな母親に悪態をつきながら家を出るが雰囲気は決して悪いものではなかった。こんな一日を過ごしつつトレーニングを積みその試合の日。彼は自分の学校の部室の

リングでトレーナー役の部員達と最後の打ち合わせをしていた。

第三章

「わかつとるな」

「ああ、大丈夫や」

グローブを打ち合わせながら部員達の言葉に応える。リングの周りには相手の学校の部員達もいれば自分の学校の部員達もいる。新聞部もいたりする。

「おい登坂」

「今日は勝つんやろな」

「アホ、今日もやるが」

新聞部の言葉にムキになってすぐに言い返す。

「今日も勝つんやろが。訂正しとかんかい」

「うるさいわ、御前の記事いうたらいつも今回も成績最下位かこれしかないんじゃ」

「悔しかったら他のニュース提供せんかい」

「何しろいうんや」

「スキャンダルでも起こせや」

「酒とか煙草とかな」

彼等も無茶苦茶を言つ。

「やってみいや」

「ほれほれ」

「そんなんしたらボクシングできんやろが」
煽りに本気で返している。

「酒とか煙草とかな、身体に悪いやろが」

「その前に校則違反やっちゅうねん」

「御前いい加減校則位読んどけや」

「くそつ、新聞部の奴等は口が強いわ」

「それよりええか？」

「最後の打ち合わせすんぞ」

そんな彼に対して部員達が言ってきた。新聞部と口喧嘩をした彼に立腹している感じた。

「それでや。相手はな」

「腕が御前より長い」

「腕がか」

自分の腕を見つつ彼等の話を聞く。

「そや、リーチがちゃう」

「そこはわかっとるやるな」

「ああ」

彼は部員達の言葉に頷く。今度は真剣な面持ちだった。

「それはな。わかっとるで」

「そやったらええな」

「それでフットワークは御前の方が上や」

「それやったら負けんで」

真剣な顔のまままた頷いた。

「誰にもな。じゃあ足で攻めるわ」

「ああ、そうしろ」

「そうすれば勝てるで」

「よっしゃ」

ここまで話して意を決した顔をあげた。

「じゃあそろそろゴングやな。正面からぶつかるで」

「勝てや」

「俺が負けるかい」

燃える目で相手を見据えつつ応える。既に身体も相手に向けている。既に戦闘態勢に入っている。

「ほな行くで」

「ああ、やったれ」

「打ちのめして来い」

こう彼に声をかけて試合に行かせる。試合は相手のリーチを意識しつつ慎重に進める。互いに小競り合いを続けつつ数ラウンドを過

「よし遂には最終ラウンドとなった。」

最終ラウンドに向かう前に。また部員達から話を聞いていた。

「今のところ互角や」

「このままやったら引き分けやぞ」

「ああ、わかっとなる」

リングの上で屈伸しつつ彼等に応える。グローブを嵌めた手は口
ープにかけている。

「いよいよや。やったるで」

「やるんか？」

「相手見てみい」

ここで部員達に相手を見るように言った。

「どうなっとなる？」

「ばてとるわ」

「まあそやるな」

彼等は相手を見てそれぞれ言った。見ればその相手はもうかなり
ばてている。小勢り合えばかりだったというのに肩で息をしている。

「あれだけ動き回ったらな」

「御前に合わせてな」

「体力でも負けないで」

守はこう言つて不敵な笑みを浮かべてみせた。

「フットワークとこれやったな。誰でもな」

「そやな。御前にはな」

「殆どの奴がその二つでは勝てへん」

「どうやらこの二つが彼の長所であるらしい。見たところそれ程大
きくはなく腕も短い。しあくしその彼でも長所を活かしているのだ
った。」

第四章

「それやな」

「ほな。行って来い」

「一撃で決めるで」

完全に立ち相手に身体を向けてから言った。

「一撃でな」

「ああ、やってみい」

「御前の言う通りな」

「フィニッシュ＝ブローってやつや」

言いながらゴングを待つ。

「それは一発でええんや」

こう呟きつつゴングを聞いた。そうして相手との最後の三分に入る。最後の三分に入ってから二分半が過ぎた。その時だった。

「くっ！」

相手がそのリーチを活かし右のストレートを放ってきた。フットワークを活かして攻撃をかわし続ける守に苛立つての攻撃だった。これで決めるつもりだったのだ。

ところがだった。彼はこの攻撃をかわした。左に流れるように動いたのだ。

「またかい！」

「そや！けれどな！」

相手に対して叫ぶ。

「俺はこの時を待ってたんや！」

「何！」

「隙だらけや！」

技を放ちつつ叫ぶ。

「右手が伸びきるとるで！焦ったな！」

「くっ！」

「最後の最後！これで終わりや！」

言いながらアッパーに入る。

「おらよ！」

「ぐぶっ！」

アッパーが攻撃を放ちそのまま隙を生み出してしまっていた相手の顎に当たる。既にスタミナをかなり消耗してしまっていた彼はこれで倒れた。本当に一撃だった。

「これで終わりや」

「ああ、勝ったな」

「またな」

勝って腕を掲げられてからコーナーに戻ってきた守に部員達が声をかける。

「けれどまた最終ラウンドやったな」

「時間がかかるな」

「それはしゃあない」

これはいいとする守だった。

「相手も本気や。そう上手いこといくかい」

「そらそうやけれどな」

「新聞部はまた書くぞ」

「あいつ等が何てや？」

丁度今何かを書いているその新聞部の面々を見つつ彼等に問う。

「またギリチヨンの勝ちやってな」

「相変わらずギリギリやてな」

「そうか。けれど勝ちば勝ちや」

だがこれについては案外気にしていないようだった。

「負けても引き分けでもあらへん。だからええ」

「そうなんか。それは変わらんや」

「何があっても正面から勝つ」

部員に対して言い切ったのだった。

「それが俺や」

「登坂守ちゆうことかい」

「そや、俺の辞書に卑怯とか姑息っていう字はあらへん」
「こつもさえ言つ。」

「どっかの出来損ないの猿親子とちやうで」

「まああれはな」

「ただの馬鹿親子やし」

ボクシング部員としてそれには頷く一同だった。同じ大阪人としてもあの親子は到底認められないというのが彼等の考えでもある。

「あんなんとは流石にちやうわ」

「御前でもな」

「何か褒められてる気がせんやけれどな」

「褒めとるんじゃ」

「勝ったやろが」

「ああ」

今度の言葉には頷くことができた。

「だからや。ようやった」

「後で祝勝会やな」

「ああ。インタヴューもあるしな」

ここでまた新聞部員をちらりと見た。

「全く。いつも好き放題書いてくれるわ」

「そう言うな」

「それも仕事のうちや」

そんな話をしつつ勝利を噛み締めていた。彼は強かった。その強さを保つ為にトレーニングも欠かさない。勝ったその日も家に帰るとランニングだった。

「よお続くわ、ホンマ」

「ボクシングとお店のことだけは熱心やな」

「当たり前じゃ、アホ」

弟と妹達に対して言葉を返す。

「この二つだけは止めんで」

「まあ家の仕事は止めたら飯抜きやしな」

「それは当然としてや」

「ボクシングかい」

ランニング帰りの汗を流した顔で彼等に応えた。

「これは俺の二つの生きがいのうちの一つや」

「もう一つあるんかい」

「言つとくが勉強とちやうぞ」

「ああ、それはわかっとるから」

弟がこう返す。

「兄ちゃんが勉強してんの見たとこないしな」

「それだけはうちもわかるわ」

妹も続く。

「兄ちゃんがアホやってことはな」

「だから僕等は勉強も頑張るんや」

「兄ちゃんみたいになりたないからな」

「俺は反面教師か」

弟達にじかに言われて流石に気分が悪い。だからここで彼等の名前を出して怒った。

「こら讓、沙耶」

「何や？」

「アホは薬でもなおらんで」

「そんなん言つてるんちやうわ」

とりあえずそれは強引に押さえつけた。

第五章

「俺にとつちや勉強なんてどうでもええんや」

「いつも同じこと言うな」

「ちよつとは進歩しいや」

「だからや。そんなん名前が書ければええ」

これだけにこだわっていた。

「そやけれどな。ボクシングはちやう」

「それで食うつもりかいな」

「食うのはお好み焼きでや」

もう一つの生きがいも出ず。

「しかしや。ボクシングはや」

「何や？」

「俺の夢や」

今度はヒンズースクワットをはじめた。試合の後でもいつものトレーニングだった。

「これはな。俺の夢や」

「何になるつもりや？」

「決まつとるやろ」

こう譲に返した。

「チャンピオンになるんや」

「チャンピオンか」

「そや、世界チャンピオンや」

スクワットでさらに汗をかきながらの言葉である。

「世界チャンピオンになる。だからや」

「ボクシングやってるんやな」

「拳一つで世界を掴む」

言葉が確固たるものになっていた。

「これからな」

「アホみたいな夢やな」

「空想し過ぎや」

譲も沙耶もそんな兄の言葉をばっさりと切り捨てた。

「そんなんでできるかいな」

「精々学校のチャンピオンやろが」

「言つな、おい」

今の言葉は守にとっては聞き捨てならないものだった。

「俺が負けるっちゅうんかい。今まで無敗の俺に」

「じゃあ今度の全国大会どうするんや？」

「優勝するんかいな」

「当たり前やろが。やっと出るんや」

強い言葉だった。

「一年では試合よりまずトレーニングやった」

「ああ」

この学校ではかなり素質があっても一年の間はみっちりトレーニングを積んでいくのが方針なのだ。だから彼は大会に出ていなかったのだ。

「二年は残念やったけれどな」

「折角大阪府じゃ優勝したのにな」

「盲腸なんてな」

「無念やった」

そういう事情があったのだ。だから彼は二年の時は全国大会には出ていないのだ。急性盲腸だったのでどうしようもなかったのだ。

「けれどや。その無念を越えてや」

「今度は交通事故かもな」

「車には注意しいや」

「御前等ちよつとは応援せんかい」

あまりにも冷たい彼等の言葉に遂に切れた。

「それが兄貴に言う言葉か」

「兄貴やから言うんや」

「そやで」

ぶしっけな感じの返事だった。

「他の人間にこんなん言うかいな」

「失礼やろが」

「俺やったら失礼ちゃうんか」

そんな彼等の言葉に内心かなり腹が立った。

「何ちゆう奴等や、全く」

言いながら今度は腕立て伏せをはじめた。汗が床に滴り落ちる。

「それでや。その大会やけれど」

「ああ」

「何時やった？」

「確かもうすぐやったよな」

「もうすぐももうすぐや」

守の言葉は不意に妙な感じになった。

「来月や」

「そやからトレーニングも何時にも増して熱心なんやな」

「そういうことや。けれどな」

ここで彼は言うのだった。

「お好み焼きはやるからな」

「それはかいな」

「そや。安心せい」

顔だけでなく手の甲にも汗が流れている。身体全体から湯気さえ立っている。

「それは忘れんからな」

「ほなまあ頼むで」

「精々殴り殺されんようにな」

「まだ言うか、御前は」

沙耶の今度の言葉にもまた言う。

「俺は相手を殺したりはせえへん」

「兄ちゃんが殺されるって言うたんやけどな」

「俺はスポーツマンやぞ」
言葉の胸が張っていた。

「そんなことするかい。いつも正々堂々や」

「卑怯なことはせえへんってことかいな」

「そっや」

このことは断言していた。

「絶対にな。それはあらへん」

「まあ昔からそうやったしな」

譲は兄のその言葉を聞いて頷いた。

「兄ちゃんせこいこととか汚いことはせえへんからな」

「勝つか負けるかや」

実に単純明快な二者択一だった。

「どっちかしかないんや」

「で、勝つんやな」

「そや、絶対に勝つ」

また断言する。

「何があってもな。今回も勝つたるで」

「そっかいな」

「まあ精々死なんようにな」

「まだ言っんかい」

最後まで口が減らない沙耶にかなり腹が立った。だが今はトレーニングを優先させたのだった。そしてその全国大会。彼は順調に勝ち進んでいた。まるで去年のうっぶんを晴らすかのように。勝って勝って勝ち続けていた。

「おいおい、絶対調やな」

「凄い勢いやないか」

「当然や」

守は部員達の言葉に応える。先程の試合も勝ったのである。彼等は今試合会場の外の自動販売機のコーナーでドリンクを飲んでいた。守が飲んでいるのはポカリスエットだった。

「どいつもこいつも強い」

「強いか」

「伊達に全国大会に出てるわけやないわ」

「このことは認める。」

「しかしや」

「しかし？」

「何や？」

「俺はもつと強いんや」

ポカリスエットを飲んで自信に満ちた顔で述べたのだった。

「だから勝てるんや」

「御前が強いからや」

「そや」

また断言してみせる。

「俺はな。これまで人の倍トレーニングを積んできた」

「まあそれはな」

「ようやってたわ」

これはもう皆知っていることだった。

「御前ボクシングは真面目やからな」

「あとお好み焼きのことは」

「どちらも俺には離せへんものや」

立ってポカリスエットを飲みながら語る。

「どちらもな。だから」

「真面目にやるんかい」

「どっちも死ぬ気でやっとな」

また言うのであった。

「死ぬ気でな」

「よっしゃ、死ぬ気か」

一人が彼のその言葉を受けて言った。

「そこまで思っておるんやな」

「あかんか？」

「いや、ええ」

彼はそれはよしとした。

「しかしや」

「しかし。何や？」

「それだけか？」

強い声で彼に問うてきた。この部員は今はコーラを飲んでいる。

ダイエツトペプシだ。

「それとボクシングやな」

これも話に出すのであった。

「やっぱりこれもや」

「そうか」

「やっぱりそうなるか」

部員達は彼の今の言葉に頷いた。

「根性見せたるで」

守はまた言った。

「浪速のど根性な」

「ああ、そや」

彼の浪速のど根性という言葉に反応したのか。部員の一人がここで言った。

第六章

「面白いことがわかったで」

「何や？」

「御前のBブロックあるやろ」

「ああ」

「そこ勝って決勝まで行くとな」

「こつ守に対して話すのだった。」

「ひよつとしたら東京の奴が出て来るかも知れんで」

「東京の奴がかいな」

「名前は原申伸」

「おいおい、狙ってるんかい」

「守だけでなく他の部員達もその名前を聞いて思わず声をあげた。」

「東京で上の名字が原で名前がそれかい」

「喧嘩売ってるような名前やな」

「実には大阪的な表現で感情が出される。」

「それで蕎麦か何か好物やったら」

「ホンマのうざったい東京モンやな」

「何でも家はもんじゃ屋らしいな」

「蕎麦は出なかったがもんじゃが出て来た。」

「葛飾の生まれらしいわ」

「ほう、下町かいな」

「俺等と同じやな」

彼等のいる住吉もまさに大阪の下町なのだ。東成や生野、西成、浪速という辺りが大阪の下町だ。東京と比べて大阪は下町の割合が多いのである。

「寅さんとか両さんやな」

「こっちはじゃりん子とか花の応援団やな」

「負けてへんで」

何故か妙な対抗心を出している。

「負けてたまるか」

「なあ、登坂」

「言われんでもわかってるわ」

守も彼等に言われるまでもないといった感じだった。

「俺はやるで」

「ああ、やったれ」

「勝つたるで、東京モンにな」

「さつきも言っただけれどな、浪速のど根性見せたる」

言葉の勢いが強くなっていた。

「絶対にな。あんな墨汁みたいなつゆの奴等に負けてたまるか」

「蕎麦も大阪や」

「なあ」

蕎麦にまで言う。

「向こうは醤油と卸し大根だけやる？こっちはな」

「昆布に鰹や。だしは圧勝や」

「もんじゃがナンボのもんや」

相手のその料理にまで文句をつける。

「お好み焼きに勝てるかい」

「野球は阪神や」

おまけに野球まで話に出すのだった。何故か彼等の中では全てが一つになっていた。

「巨人！？ふざけるな」

「巨人応援する奴は東京モンだけや」

「そやそや」

話に論理性はないがそれでも彼等は納得していた。

「巨人応援するアホに負けるなよ」

「ええな」

「わかってるで」

「まあもつとも原はヤクルトファンらしいけれどな」

ここで最初に情報を出した部員が言ってきた。

「何でもいつもヤクルトの帽子被っとるらしいわ」

「あっ、そうなんか」

「まあそれはいいわ」

急にかなりトーンダウンした。何故かヤクルトには優しい。

「ヤクルトはな」

「そやな、別にな」

「どうでもええや」

全員がそうであった。傍目から見ればかなり異様な程のテンションの変わり様であった。しかしそれでも彼等は話を続けるのだった。

「それでや」

「ああ」

「そいつ強いんか？」

今問うたのは守だった。

「そいつは。強いんか？もんじゃ男」

「強いらしいな」

その部員が真剣な声で述べてきた。

第七章

「それもごっついな」

「ごっついか」

「何でも無敗らしいわ」

こう守に答えた。

「通称無敗の帝王」

「ほお」

守はその二つ名を聞いて声をあげた。

「また格好ええ名前やないけ」

「下町のチャンプとも言われとるらしいわ」

「どっちにしる強いんやな」

「それは間違いないみたいや」

「おもしろいけんけ」

守はそこまで聞いたうえでまた言った。

「その東京モン、おもしろいわ」

「おもしろいか」

「勝つたるで」

そして宣言した。

「俺、勝つたるわ」

「まだ決勝までいってへんのか」

「行つたる」

言われたらこう返した。

「勝ちまくつてな。言つたるで」

「完全にやる気やねんな」

「当たり前や」

返す言葉に迷いはない。

「絶対に勝つ。勝ちまくつたる」

「決勝までそれで行くんやな」

「決勝もや」

今の問いに返したのも早かった。やはり迷いはない。

「勝つで。何があってもな」

「本気やな」

「俺は何時でも本気や。けれどな」

「けれど？」

「今回は特に本気や」

目が燃えていた。それが顔にも出ていた。特に目に。

「めっちゃな。俺はやるで」

「おお、登坂がマジになつたわ」

「鶏冠に来たかい」

いいタイミングで駄洒落が出た。

「こらおもしろいことになりそうやな」

「さて、どうなるかな。この勝負」

皆これからのことが楽しみになってきた。守はその中で燃えてきていた。そしてその言葉通り勝利を重ね遂に。決勝にコマを進めたのである。

「おいおい、東京と大阪やで」

「石原と橋下かい」

知事の名前まで出て来た。

「とにかくこらおもしろいで」

「どっちが勝つんかいな」

会場は早速そんな声で一杯になっていた。この時守は大阪城にいた。試合会場からすぐ側にある。そこでまた部員達と話をしていた。

「おもしろいのお」

彼はまずこう言うのだった。

「今の話。おもしろいわ」

「何でおもしろいねん」

「訳わからんこと言うなこいつ」

他の部員達は彼の今の言葉を聞いて目をひそめさせていた。彼等

の後ろにあの雄大な天守閣が見える。五層七階の見事なものが。そして石垣が木々に隠れて見えている。それを見ているとやはり大坂城は大坂の象徴の一つであることがわかる。実に見事なものだ。

「何で東京が先やねん」

彼が言うのはそこだった。

「皆話をするのはええ」

「ああ」

「けれどな。どいつもこいつも大坂を第二に出すな」

「そういえばそやな」

「東京を最初に出しとるわ」

「ここは大坂やぞ」

彼はガンとした態度だった。

「大坂が最初に来んでどないすんねん。俺はな」

「どないしたんや？」

「今日ここに来るまでに願かけしてきた」

「何処でや？」

「決まっとるやろ」

その問いにまる決めつけで返した。

「住吉さんや」

「あそこか」

「それと通天閣や」

そこも出してきた。

第八章

「ビリケンさんにな」

「その二つに願かけしてきたんやな」

「そや。大阪やで」

またこれだった。

「この二つにお参りせんでどないすんねん」

「まあ御利益はちゃうわ」

「他の神さんよりもな」

部員達もそこは大阪鼻肩だった。

「けれど法善寺は行かんかったんかい」

「そこはどないしたんや？」

「そこは大会前に行つたわ」

どうも結構神仏を拝む性質のようである。

「だから今はええ」

「そうか。だったらええんやけれどな」

「とにかくや」

ここでまた言うのだった。

「大阪が第一やるが」

「確かにな」

「まあそれはな」

「見てみい」

後ろを振り向いてきた。

「あれを。あれは何や」

「大阪城や」

「天守閣や」

「そうや。太閤さんの作った大阪城や」

今の大阪城は徳川幕府が作ったものだがそれはあえて無視していいのではない。守はそんなことは一切知らないだけである。

「あの大阪城は天下第一の城や」
「確かにな」
「それはな」
「そう、大阪は天下第一なんや」
「かなり論理性に欠ける言葉であつた。」
「その大阪の人間が東京を先に言うなんてどうなんや」
「まあおかしいわな」
「言われてみればな」
「だからや。俺はそういう意味でもやつたるで」
「力瘤入れて宣言する。」
「勝つ。勝つたる」
「絶対にやな」
「ああ。勝つのは俺や」
「また宣言した。」
「大阪が勝つんや」
「ほな。やつてくれるんやな」
「当たり前や」
「二つの拳を作つて胸の前で打ち合わせた。」
「やつたるで。絶対な」
「勝つのはうちか」
「大阪や」
「また言う。」
「勝つのは大阪やで」
「まあそやな」
「部員の一人がまた言った。」
「大阪のうどんと東京のうどんどっちが美味しい？」
「あんなうどん食えるか」
「あれが食いもんか」
「皆言いたい放題である。」
「あのつゆ墨汁か？」

「醤油そのまま湯にとかしたんちゃうんか」

大阪人特有の文句のつけ方である。彼等はまず東京をけなす時にうどんを出すのだ。その黒さと辛さを言わなくては気が済まないのだ。

「あの辛さもなあ」

「食えるかいな」

「ホンマや」

やはり辛さを叩いてきた。

「しかも蕎麦かてなあ」

「ああ、あれもあかんで」

蕎麦までけなすのはあまりないが彼等は別だった。

「量少ないしな」

「高いしな」

「そやそや。しかもやつぱりつゆがあかん」

つゆまでけなす。

「あんなんやつたらスーパーで大安売りしてるの買つてのびるまでたいて食うた方がな」

「美味いわな」

「そうや。何が蕎麦は東京や」

蕎麦まで容赦なくけなす。

「あんなんあかんあかん」

「蕎麦も大阪やな」

「天麩羅も寿司もや」

そこにまで話を持っていく。

「狸親父あれ食うてあたってたしな」

「アホやアホ」

徳川家康のことだ。彼が鯛の天麩羅、実際は鯛をごま油であげたものを食べてそれで死んだことを笑いものにしてているのだ。大阪人の間で彼は今だに人気がない。それもその筈で大阪といえば豊臣だがその豊臣を滅ぼした憎き相手に他ならないからである。

「寿司もな。東京の寿司屋は威張つとる」

「何で食い物屋が威張るんやろな」

「アホやからやろ」

彼等の歳で自分達で寿司を食べに行く筈がない。だからこれも偏見でしかない。しかし偏見だからこそ思いきり言っていたのだ。

「ホンマ東京はな」

「あかんあかん」

「食いもんで惨敗しとるがな」

「こつちは人情の街大阪や」

大阪の人間がよく使うキャッチフレーズだ。

「あんな何も無いス力みたいな街とはちゃうからな」

「絶対に負けへん」

「ちよつと聞くで」

ここでその試合をする守が皆に尋ねてきた。

「食いもんでは圧勝やな」

「ああ」

「それだけで勝ってるわ」

皆このことはすぐに返してきた。

「さつきから言ってるやないか」

「それがどないしたんや？」

「じゃあ聞くで」

何故かここで彼の顔は真剣そのものになっていた。

「お好み焼きともんじや」

「お好み焼きと？」

「どつちが上や」

こつち皆に問うてきた。

「どつちがや。上や」

「どつちがが」

「そや。どつちが勝つとる？」

声も真剣そのものだった。その声で皆に問うのであった。

「それをはつきり聞きたいんやけれどな」
「アホ言うな」
「そんなのわかつとるわ」
「そや、最初からな」
「これが皆の返答だった。」
「わかつとるって？」
「お好み焼きの圧勝やろが」
「これが一番勝ってるわ」
皆また口々に言う。
「あんなもんじゃみたいなゲロみたいなもん食えるか」
「こつちのお好み焼き見てみい」
そのお好み焼き屋の息子に対しての言葉だ。
「ポリウムもあれば味もええ」
「しかも安くても入れられる」
「モダンにも出来る」
話を少し膨らませてもいた。お好み焼きとモダン焼きはまた違うものだからだ。
「全然勝負にならへんがな」
「そら御前が一番わかつとることやろが」
「そやな」
あらためて皆の言葉に頷く守だった。
「そやつたらな」
「行くんか」
「ああ、行つたる」
ここで大阪城に顔を向けた。そのうえでまた言う。
「太閤さんに誓うで。俺は絶対に勝つ」
「太閤神社お参りしたか？」
「あつ、それはまだや」
言われてこのことを思い出す。
「それはな」

「まだまだあかんのう」

「それを忘れたらあかんやろが」
皆呆れて彼に言う。

「まあな。それはな」

「試合終つてからやな」

「戦勝報告やな」

守も言った。

「これはな」

「そや。それでええやろ」

「ほな行くで」

「ああ。絶対に勝つたる」

歩きはじめてからまた述べる。

「真正面からな」

最後にこう言つて試合に向かう。リングには同時に向かう。観客席の声援の中向かい合う相手は一見するとスマートな二枚目であった。

「あいつか」

「そや、原申伸や」

セコンド役の部員の一人が言った。相手側の青コーナーの席に座つている相手は涼しげな顔をした好青年といった外見だった。

「あいつがそうや」

「下町のもんじゃ焼きの息子やな」

「その通りや」

「そうは見えへんけれどな」

守は自分のセコンドと話をする彼を見て言った。ライトに照らされるリングの周りには多くの観客達で埋められまさに決戦の場であった。

「渋谷とか原宿か？」

「ああ」

「そこにいそいな感じやな」

彼はそのまま感じたことを述べたのだった。

「見ただけやったらな」

「そやな。けれどな」

「強いんやな」

「めっちや強い」

こっつ答えが来た。

第九章

「アホ程な」

「おい、それやったら勝てるで」

守は毅然としてその原を見つつ言い切ってきた。

「それやったらな」

「何でや」

「どうせ俺はアホや」

「自分で言うか？」

「だから聞けや。向こうは馬鹿やろが」

「ああ」

言葉の文化の違いだ。関東は馬鹿で関西は阿呆なのだ。だから彼は今ここであえてこのことを言葉に出して話してみせたのである。

「アホはアホでもや」

「ちやうんか」

「関西のアホの方が重いんや。そこにあるもんがな」

「何かようわからんな」

実際かなり意味不明な言葉ではあった。

「アホに重さがあるんかいな」

「あるんや。まあ見てみい」

今度はまだわかる言葉であった。

「俺は勝つ。あんなイケメンに負けてたまるかい」

「ああ、それはわかるわ」

「御前の顔どう見ても吉本やからな」

「吉本でも最近は女にもてるけれどな」

「御前はなあ」

またここで好き放題言い出す面々だがこれはかえっていいことであつた。何しろそれだけリラックスしてきているということであるからだ。

「その頭やからな」
「アホやからな」
「ええかっこしいの東京モンに負けるか」
「とにかく言いたいのはこのことだった。」
「何があつてもな。俺は負けへんで」
「よし、じゃあその意気や」
「行つて来い」
「いよいよ時間であつた。」
「勝つてな」
「根性見せいや」
「浪速の根性やな」
「守も立ち上がりつつ言う。顔はじつと正面の相手を見据えていた。」
「そういうことやろ？つまりや」
「ああ。お好み焼きや」
「それやぞ」
「またここで守の家の生業が話に出る。」
「勝つたらそれでパーティーでもするか？」
「御前の家だな」
「金はちゃんと払えよ」
「まずはこのことは釘を刺してきた。」
「そこはちゃんとせえよ」
「わかつとるわ」
「金のことだけはしつかりしとるな、ホンマ」
「これだけは別や」
「また実に大阪人らしい言葉である。」
「金はな」
「ちえつ、わかつたわ」
「それはな」
「彼等もそれで納得するしかなかった。」
「まあとにかくや」

「勝つたらや」

「俺の家やな」

「そや」

このことに関しての結論はもう出ていた。

「やるで、お好み焼きパーティー」

「焼きそばにたこ焼きも用意しとけや」

「ナンボでも食えや」

彼としてもそれが願ったり適ったりだった。商売人としては商品が売れるにこしたことはない。食べ物には食べられるにこしたことはないのだ。

「思う存分な」

「ビールもな」

「やるか」

「それは表に出すな」

これについては注意をしておいた。

「先生も来るんやろ？」

「まあそやな」

「やっぱり顧問やしな」

「じゃあ止めとくか、これは」

一人が流石に止めた。

「酒だけはな」

「サイダーにしとくか、我慢して」

「コーラもええけれどな」

「それも結局勝つたらやし」

別の一人がここで話を元に戻した。

「ほな登坂」

「勝つて来い」

あらためて守の背中に声をかける。

「勝てばパーティーやしな」

「根性見せるんやな」

「よっしゃ」

彼等の言葉を受けてグローブの拳を打ち合わせた。

「根性見せたるで」

こう言ったその時にゴングが鳴った。これが試合のはじまりだった。

試合は互角だった。守は確かに強いが原もかなりのものだった。

フットワークを使う彼と互角の動きさえ見せる。守はまずそのことに驚いていた。

「俺と足は互角やぞ」

「わかつとるわ」

「有り得んな」

三ラウンドが終わった時だった。青コーナーの原を睨み据えつつ言う守に部員達が言う。見れば彼等も原を見据えている。そのうえで話だった。

「御前と同じだけ動けるなんてな」

「俺もはじめて見たぞ」

「ブローも強いで」

守はそのことも言った。

「しかもや。鋭い」

「鋭いか」

「鋭さは向こうの方が上やな」

冷静に分析しての言葉だった。

「拳の鋭さはな」

「そんなに凄いんか」

「蜂や」

守は言った。

「蜂の一刺しや。そこまで鋭いで、あれは」

「おい、大丈夫か!？」

部員の一人が彼の今の言葉を受けて怪訝な顔を見せた。

「そんなんが相手に。勝てるんやろな」

「確かに足は互角で鋭さも向こうが上や」
「またこの二つを話す。」
「それでもや」
「それでも？」
「どないしたんや？」
「拳の強さは俺やな」
「こつも言うのだった。」
「俺の方が上や」
「そつちは御前か」
「それにや」
「学校の勉強の時とは全く違う冷静な分析がさらに続く。」
「俺はもう一つ勝つとるもんがある」
「もう一つか」
「ああ。それで勝てるで」
「強い言葉で語るのだった。」
「絶対にな」
「自信あるんやな」
「あるに決まってるやろ」
「これが返事であった。」
「なかつたらな。とつくに負けてるわ」
「負けか」
「最後に勝つのは俺や」
「こつまで言うのだった。」
「何があつてもな。勝つたるで」
「それも正々堂々とやな」
「絶対に負けへん」
「このことを言いながらさらに。」
「それに卑怯なこともせん」
「それもやな」
「俺は大阪の男や」

言葉に何かが宿っていた。

「浪速の根性、腐ったものやあらへんで」

「匂つけれどな」

部員の一人がここであえて茶化す。リラックスさせる為である。

第十章

「薄口醤油の匂いがぷうんとな」

「ええやんけ。醤油よりも美味いわ」

そして守もそれに乗ってみせる。

「その味がええんや」

「醤油とどっちが上や？」

「言つまでもあらへん、薄口醤油や」

「じゃあおでんはどうなんや？」

「味噌や」

これが関西のおでんである。関西では味噌でたいているのだ。ところが関東では醤油でたく。だから昔はそうしたおでんを関東煮と呼んでいたのである。

「うちはおでんはやつとらんけれどな」

「よし、そういうこつちや」

「わかつとるんやつたらええ」

彼等は食べ物の話で区切りをつけさせた。

「それやつたら行くんや」

「勝つて来い」

「このラウンドでは決まらんやろ」

守はそう見ていたのだった。

「相手もまだ。スタミナがあるで」

「じゃあ粘るんやな」

「東京モンはからつ風やつたな」

また話がそつちの方にいった。

「あの寒い乾いた風やつたな」

「ああ」

「大阪にはそんなんあらへん」

守はまた言う。

「あるのはな。どれだけ粘っても勝つ。それだけや」

「これだけは阪神とちゃうな」

「まあ阪神はな」

皆阪神に関しては苦笑いになっていた。

「あつさり味やからな」

「ほんま。負ける時はいつもあつさりや」

「全然粘らんで負けるわ、いつもいつも」

これが阪神という球団の特徴である。とかく負ける時は本当にあつさりとしているのだ。あまりにもあつさりとしていて情ない程である。

「そんなんやけれどな。ボクシングはな」

「ちゃうで」

「こつてりソースや」

そしてまた食べ物話になる。

「こつてりとしたソースやから」

「粘りは凄いで」

「その粘りでも勝つたる」

ここで立ち上がった守だった。

「納豆かて食べるんやしな」

「それは俺も食うぞ」

「俺もや」

皆結構納豆が好きなようである。

「今時食わへんのは少数派やろ」

「美味しいし栄養がある」

それぞれ納豆について語る。

「実にええ食べもんやないか」

「おとんやおかんは何でか忌み嫌ってるけれどな」

かつて、つい最近まで関西では納豆は食べなかつたのだ。その真価を認めたのは本当にこの最近のことである。それまでは関西において納豆を食べるといふことは完全に異端であったのだ。

「けれど俺等はちやうからな」

「納豆食べて元気一発や」

「お好み焼きパワーに納豆も入れてや」

守もその納豆をプラスさせてきた。

「やったるか」

「よしっ」

こうして第四ラウンドがはじまった。相変わらず激しい攻防が続くがこのラウンドでは決まらなかった。そして第四、第五と進み遂には最終ラウンドとなったのであった。

その最終ラウンドになるとセコンド側は流石に騒ぐのは自粛していたが観客席が騒がしくなった。皆口々に応援をするのである。

「行けや登坂！」

「勝たんかい！」

赤コーナー側からの声である。

「頑張れ原！」

「負けるなよ！」

青コーナー側からはこうだ。完全に大阪と東京に分かれていた。

「負けてたまるか！！」

「こつちもだ！」

そして守と原もそれは同じだった。

「勝つのはな。お好み焼きやで！」

「いや、もんじゃだ！」

それぞれの家の看板をも背負って殴り合っ。

「もんじゃがお好み焼きに負けてたまるか！」

「もんじゃがかい。ふざけるな！」

ここで守は思いきり右ストレートを出してきた。

「お好み焼きパワー、受けんかい！」

「受けてたまるか！」

しかし原は守のその右ストレートを身体を右に捻ってかわした。

「んっ!？」

「御前のパンチは強い！」

原もそれは見抜いていた。これまでの戦いで。

「それでも遅い。パンチならな！」

「しもた！」

「鋭い方がいいんだよ。俺の勝ちだな！」

「ぐうっ！」

今度は原が左ストレートを出した。それはそのまま見事に守の顔に当たった。その顔が一瞬ひしゃげ血反吐が飛び散る。見事に決まった。

「やられた!？」

「やったか!？」

観客席も守がストレートを浴びたのを見て声を止めた。勝負あつたかと思つたのだ。

しかしだった。守は踏ん張った。吹き飛ばされず倒されもせずそのまま踏み止まった。恐ろしい粘りだった。

「あれで倒れないのか」

「アホ、これ位で倒れるかい」

守は姿勢を戻して原に言葉を返した。顔の右半分が腫れてきているがそれでも彼は不敵に笑っていた。

「大阪人はな。しぶといんや」

「しぶとい!？」

「そや」

また腹に言葉を返す。

「だからや。この程度で負けるかい」

「そうか。じゃあ次の一撃で決める」

原も今度こそという気になったのだ。それぞれまた構えに入り身構える。またしても闘いに入るのだった。

「これでな」

「来んかい」

守は今度は自分から仕掛けようとはしなかった。

「やったるからな。こつちも」

「じゃあな。その言葉通り」

原は彼の言葉を受ける形で動いてきた。すすす、と影の様に静かに前に出るのだった。やはり見事なまでのフットワークであった。

「やってやる。これでな」

右アツパーだった。それで顎を叩くつもりだった。

「決まりだ！」

「来たかい！」

しかしここで守は会心の声をあげた。

「そう来たらな！」

「何っ！？」

「楽勝でかわせるわい！」

「なっ！？」

紙一重だった。ほぼ透き通ったような感じだった。守は上半身を僅かに、しかも素早く動かしそのアツパーをかわしたのだった。見事な動きだった。

「俺のアツパーをかわした……………」

「それだけやない！」

彼はさらに言ってきた。

「これで……………終わりやあっ！」

最後に左ストレートを浴びせる。それで決まりだった。最後のブローで全てが終わった。こうして彼は見事優勝を掴んだのであった。

「やったな！」

「やったで！」

観客席から関西弁で声援が起こる。

「勝ったわ大阪が！」

「お好み焼き屋が！」

「見たかい！」

そして彼自身も最後のブローを放った左手を掲げて誇らしげに叫ぶのだった。

「俺の勝ちや！正面からな！」

「ふん、KO負けか」

原は立ち上がり少し忌々しげに彼に言った。

「久し振りだぜ。こんなのはな」

「どや、お好み焼きパワーは」

誇らしげに彼の方を見ての言葉だった。

「強いやる。パワーがちゃうんやぞ」

「上半身の動きもよかったな」

「それを読んで勝てると思うたわ」

またしても誇らしげに言う。

第十一章

「御前にな」

「そうか。実力で完全に負けたか」

「まっ、御前も強かったけれどな」

「お世辞はいらないんだがな」

「ホンマや。見てみい」

自分の右頬を指し示してみせる。

「この腫れ具合。他にも色々喰らったしな」

「それは俺もだが」

「あと一発やったな」

原に対して言う。

「それで俺は下手せんでも負けやったわ」

「あと一発でか」

「そや。勝ちも勝ちやけれどな」

それは確かなことだった。

「それでもや。一発やったな」

「ふん」

「正面からぶつかった結果やから満足しているけれどな」

「正面からか」

「大阪男はな、いざって時はいつも正面からや」

これまでで最も誇らしげな言葉であった。

「それで勝つんや。文句あらへんやろ」

「まあそれはな」

これについては原も認める。

「しかしな。今度は違つぞ」

「今度は？」

「そつだ。今度は俺が御前を倒す」

「やるんやったらやってみい」

不敵に原に言葉を返す。

「また大阪パワー見せたるわい」

これが最後の言葉だった。彼は確かに勝ったのである。そしてトロフィーを手に家に帰る。周りには約束通り部員達がついてきていた。

「ほないくで」

「ああ。お好み焼きやな」

「パーティーや」

やはり言うのはそれであった。

「モダン焼きもあるやろ」

「焼きそばもあるよな」

「食い物は何でもあるわ」

少し誇大な守の言葉だった。

「あるもんだけな」

「アホ、あるもんだけあるのは当たり前やろが」

「ないもんがあつたらそれで妙なことやろが」

「まあそやけれどな」

守もそれは頷く。

「たこ焼きもいか焼きもあるけれどな」

「たこにいかか」

「それもか」

「どちらも大阪にいて食わへんのは邪道やぞ」

守はこうまで言うのだった。

「特にたこ焼きはな」

「ああ、それやそれ」

「あのもんじゃ男たこ焼きは言わんかったな」

「そういえばそやな」

言われてはじめて気付くことだった。

「それはな。なかつたよな」

「ああ、それはな」

「何でや」

皆それが不思議であつた。

「何でそれを言わんかったんや」

「けつたいなやつちやな」

「まあそれはええんちやうか？」

これで話は終わるのだった。

「東京の奴にたこ焼きのよさはわからんわ」

「そやな」

「何せ鱧も食わん奴等や」

関係ない話まで出て東京の人間を叩くのもいつものことだった。

「それやとそれもな」

「当然か」

「まあそやな」

「それでや。行くで」

「御前の店にやな」

「ああ。用意やけれどな」

ここでトロフィーを左手に持って右手で携帯をかけるのだった。

「おい」

『ああ、守かい』

「話聞いたか？」

まずはこう切り出した。電話に出たのは母親だった。

「俺日本一になつたで」

『何や、そんなことかいな』

「そんなこと!？」

『狙うんは世界一やろが』

実にとんでもない母親の返事だった。

『日本一位で何威張ってるんや』

「あのな、お袋」

母親のそのあまりもの言葉に守も唾然としていた。

「俺は日本一になつてんぞ、チャンプになつてんぞ」

『そやから日本一やろ』

「そや」

これはどうしようもない事実である。

「だから言ってるんやろが」

『だからそれがどないしてん』

「どないしたって」

「何かな、こいつのお袋さんってな」

「そやな」

傍から聞いていた部員達も言う。

「凄いな」

「大物どころやないで」

「普通日本一になったらな」

「しかも自分の息子がや」

口々に言っていく。

「そうになったら普通はな」

「大騒ぎやろに」

「世界一になってから来いか」

「凄いわ」

部員達も驚くばかりだった。彼の母親の態度に。

第十二章

『わかったな』

「ああ、わかったわ」

守も忌々しげに母親に言葉を返す。

「じゃあ帰ったらな」

『お客さん待ってるで』

「こつちもごつつい連れて来るわ」

こつち母親に返す守もかなりのものだ。

「楽しみに待つとれや。今日はパーティーや」

『お好み焼きパーティーかいな』

「そや」

このことも母親に言う。

「ボクシング部でな」

『ええこつちや。じゃあそつちも目指すんやな』

「何をや」

『決まつとるやろ。世界一や』

また世界一という言葉が出て来た。

『世界一のお好み焼き屋や目指さんかい』

「おう、やつたるわ」

守も守で母親の言葉を受けて立つ。

「お好み焼き世界一もな。やつたるで」

『よつしや。わかったわ』

これで電話は終わった。一応は。しかしそれで全てが終わったわけではなかった。

「さて、と」

「何か凄いいおかんやな」

「お好み焼き世界一かい」

「こつちもやつたる」

守は強い言葉で言った。

「絶対にな」

「ボクシングだけやなくてか」

「ああ。もんじゃには勝った」

原との勝負のことだ。

「だから言うてもボクシングもお好み焼きもまだまだやからな」

「どっちもかい」

「そや、どっちもやったる」

左拳からストレートを出しての言葉だった。

「絶対にな」

「まあやったれ」

「応援はするわ」

「たっぷり食えや」

また拳を出していた。今度は右だ。

「これから世界一になるお好み焼きな。これから世界一になるボクサーが焼いたやつをな」

「どっちもこれからかい」

「まあ先行投資や思うて」

「頂ukai」

部員達もそんな彼を前に見ながら言うのだった。赤い夕陽が守の背中を照らしている。彼はその赤くほのかに暖かい灯りを背中に受け長い影を見えながら誓っていた。どちらでも世界一になることを。今誓っているのだった。

浪速のど根性 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8416f/>

浪速のど根性

2010年10月8日15時51分発行